

第2回 魅力ある府立高校づくり懇話会 (概要)

1 日 時

令和4年11月28日(月) 午後1時～3時

2 場 所

京都産業大学むすびわざ館 3-A (3階)

3 出席者

- 委員 11名(欠席1名)
- 教育委員会 前川教育長、木上教育次長、村山教育監、大路管理部長、吉村指導部長
村田指導部理事、相馬高校改革推進室長、石澤総務企画課長
片又高校改革推進室参事

4 概 要

- 事務局からの説明
 - 意見交換
-
-

■事務局からの説明

■意見交換(主な意見)

◆：座長 ○：委員 □：教育委員会

- ◆前回第1回では、魅力ある高等学校づくりのためにはどうすればよいか、どのような角度から議論することが望ましいのかについて、それぞれの立場からフリーな意見をいただいた。前回欠席だった委員からも、意見をいただきたい。
- 府立高校の学校改革に、この3、4年関わっている。その中で、高校生たちが非常にいきいきと勉強している現場を体感し、新しい制度的な改革や時代に応じた支援体制、社会全体が学校をどのように応援していくかといったものが垣間見えてきた。また、協力をお願いすると「高校生のためなら」と手放しで応援してくれる人たちが、学校の周りには大勢いる。高校や教育委員会、行政だけでどうにかするというのではなくて、社会との接続の中で、応援したい府民や地域の方が大勢いるという視点を持って議論していくことが、非常に大事だと考えている。
- 「普通科」とは何だろうかということ、強く感じることもある。社会ではイノベーティブな人材などが求められるが、高校までは「普通」が大きなまとまりである。「普通科」といった名称を疑っていくことも大切ではないか。社会が大きく、激しくめまぐるしく変わっている中で、価値を創造し、持続可能な社会を創り出す担い手の教育を、学習者を中心に置いて展開していかなければならない。

◆「多様な生徒のニーズに対応するその各課程の役割や望ましい教育環境」について意見をいただきたいが、視点が4つぐらいあると考える。1つ目は、不登校傾向の子どもたちに対して高等学校としてはどのような環境を整えていくのか。2つ目は、特別な支援を必要とする子どもたちにどのように対応し、どのような環境が必要なのか。3つ目は、基礎的・基本的な学力に未定着な部分がある子どもたちに対して、どのような教育機会を保障していくのか。4つ目は、それ以外で考えられる、府立高等学校として必要な対応は何か、どのような教育ニーズがあるか。これらについて、それぞれのお立場から自由に発言をいただきたい。

○不登校の生徒は学習面での発達の遅れがあるわけではなく、環境さえ整えば勉強ができるし、学力もついていく。ある中学校では、学校に通いにくい生徒が10名程度、別室に登校しながら勉強している。全て自習ということではなかなか学力はつかないので、教員が努力して熱心に対応し、高等学校を受検できる程度の学力を身につけさせているという状況もある。中学校の3年間で学校へ通うことへのハードルが低くなればよいが、まだ一定の不安がある生徒が高等学校へ進学したときに、同様の対応を求めて単位の修得・卒業ができるかとなると非常に難しい。そのため、全日制の普通科よりも、柔軟な対応や機能を持った私立の通信制課程という選択肢になっていく。

○特別な支援を要する子どもたちは、それぞれ実態や特性が異なるので、通級による指導や、日々の担任、学年部の教員からのカウンセリングによって、個別に対応をしながら何とかやっているというのが中学校の実態であると思う。こうした個別対応が必要となると、普通科の全日制高等学校への進学においては、3年間の見通しが難しい場合も考えられる。それぞれの子どもの特性や課題に応じた個別の対応がどこまで可能なのかということが、検討の1つのポイントである。

○中学校でも不登校の生徒は非常に多い。なんとか別室登校できる子もいれば、夕方以降の他の子どもたちがいないときに学校へ来る、まったく家に引きこもっているなど、状況は様々である。中学校卒業をひとつのきっかけとして変わる生徒も少なくない。その際に、高校の体制がどうかということが非常に大きく影響すると思っている。

○通級指導教室に20名程度の生徒がいる中学校もある。生徒は個々に課題があり、その子どもたちが高校に進学したときに、中学校と同様の対応ができるかということが、大きな要素である。私学の通信制高校が、近年非常に多くなっており、通級指導を受けていた生徒が通信制を選ぶということが増えてきている。昼間定時制のフレックス校も必要だが、府立高校や市立高校、私学も含めて、普通科においてどの程度対応してもらえるかということが、中学校にとっての大事な要素である。

○この数十年で高校を取り巻く状況は大きく変わっており、定時制・通信制は、以前のように勤労学生が学ぶ場ではなくなっている。不登校などの課題を抱える生徒が多くなってきており、そうした実態を踏まえた議論が必要である。

- ◆高等学校で出会う環境や先生次第で、高校生は劇的に変わる可能性がある。そういう機会となるべき教育環境がどうあるべきか、しっかりと見据えて議論する必要がある。そうした出会いの場として、フレックス学園構想でつくられた清新高校・清明高校の2校は、非常に有効に機能していると思う。中学生で不登校だった生徒たちが、丁寧な指導による環境の中、ほとんど毎日皆勤に近い状態で、喜んで学校に通っている姿を見ることができる。
- 清新高校では、発達特性のある生徒や、不登校の経験がある生徒が多く学んでいる。フレックスな時間割や学びの中で、大きく改善が見られている場合もあれば、特性から衝突する場面もある。学校としては、プラスの要素とともに課題も出てきていると思う。通級指導教室については、高校ではまだ専門性が高くないと思うので、中学校や小学校で通級指導を担当する先生方と連携しながら、自閉・情緒障害等の通級の在り方について学んでいくとよい。教員が指導の質を向上させながら、生徒に対して丁寧に個別に関わっていける体制をより充実させていくことが今後必要である。
- 単位修得について、もっとフレックスにできないかと思う。大阪に帰国子女を対象とした私立の高校があり、学期完結制をとっている。3つの学期を全て65日に統一して、仮に2学期からしか登校ができなかったとしても、2学期の中で完結して単位が取れるというシステムである。そういう形であれば、外国から帰国した生徒や不登校の生徒なども、途中から学んで単位を取れる。このような、よりフレックスな教育課程等を組んでいくことで、様々なニーズに対応していくことができるのではないかな。
- ◆全国では、柔軟な教育課程を持つ高等学校がかなり増えてきているようである。74単位とれば卒業できるということならば、一定の単位は通学制で、一定の単位は通信制でというような柔軟な組み合わせなども、今後は京都府でも積極的に考えていくことができるのではないかな。
- 不登校の生徒の中には学力が非常に高い子もいる。学力はあるが、授業に参加できず、学校にも行けないといった1人の生徒が、他府県にある校則のない学校に行きたいと親に言ったという話を聞いた。その学校は、校則はほとんどなく、制服の着用は式典の際のみ、学校行事やイベントに力を入れているという、歴史のある県立高校だそうだ。歴史のある県立学校がそのような柔軟な対応をしているのは、大きなチャレンジであると思う。思い切った変革が定着している。子どもが行きたいと思える学校を選んで行けることが大事であり、そのような魅力があれば、距離は関係ないと感じた。
- 中学生や保護者からすると、スクールガイドとは大事である。中学生は魅力ある学校方針や学習スタイルを参考にして学校を選んでいく。そうした入り口にあたって、広く提示していくことが大切である。
- 保護者としては、楽しく毎日学校に通ってくれることが何より大切だと思うが、高校選びはとても重要である。身近なところで、中学校の頃から不登校だった子、高校に入学してから通えなくなった子、また理由も様々である。そうした子たちの高校の選択肢は、そろって私立の通

信制高校である。公立高校に合格したものの通えなくなって再チャレンジする際も、やはり私立の通信制高校になっている。そのような再チャレンジが公立でもできるようになり、それを中学や高校で広く伝えられるようになっていけばよい。

- 夜間定時制では、1日4時間の授業が週5日で20単位。それが4年間で80単位ということになっている。生徒の話では、生徒の人数が少ないので気軽に先生に相談ができる、アットホームな雰囲気があるということだ。先生と生徒の距離感が非常に近いので、ここでゆっくりと4年間かけて勉強がしたいという生徒が多い。
- 夜間定時制の生徒は、昼間は主にアルバイトをしている。学校での教育活動も非常に大事であるが、アルバイトを通して社会的なことを学び、成長している面がある。社会経験や生活体験が非常に少ない生徒が多く、学校での教育活動の中で様々な体験をさせることが、生徒の成長にとって大切である。
- 全日制において、漢字がまったく読めないなどの特性のある生徒が在籍している。そのような場合には、個別対応が難しい教員体制を補助するための支援がされる。そういった対応は、支援が必要な生徒が入学することが判明した段階で、その時々に行うものである。そのような支援体制をもとより備えたフレックスな学校は、地域の子どもたちにとって重要な存在と言える。
- 定時制・通信制課程に通う生徒には、不登校経験が長い生徒、特別な支援が必要な生徒、学力が未定着な生徒、コミュニケーションがうまく取れない生徒、家庭に経済的な困難を抱える生徒など、多様な生徒が在籍しているが、もう1回やり直したい、最初から学んでなんとか高校を卒業したいという思いは共通している。
- 多様な生徒とひとくくりに言われるが、やはり生徒それぞれにおいて違いがある。清明高校・清新高校などの昼間定時制には、一定の学力があるが、人間関係をつくるのが苦手であったり、集団に馴染めなかったりというような特性がある生徒が多いと思う。一方で、夜間定時制は、基礎的な学力が十分に定着していない生徒が多い傾向である。また、それに加えて家庭の状況が厳しい生徒も多い傾向である。いずれにしても、高校を卒業した後に社会に出て、自分自身でしっかりと生きていける力をつけさせることが、教育として大切である。
- 昔は、仕事をしていて昼間に学校に通えないので夜間定時制で学ぶという状況があったが、今はそういう生徒はほとんどいない。そのため、昼間の時間にしっかり社会経験をするよう、アルバイトをすすめている。1年生の段階では半分ぐらいだが、学年が上がるにつれて増え、3、4年生になると7、8割がアルバイトをするようになる。そうすることで、自分の生活リズムがしっかり確立されている。中には、そのアルバイト先にそのまま就職する生徒もいる。そうした指導においては、少人数で丁寧に関わる必要があり、夜間定時制も一定ニーズがあると思う。

- 現在の夜間定時制では、部活動はほとんど成立しない状況になっている。生徒たちは学校を気に入れば気に入るほど学校生活を楽しみたいが、チームスポーツの部活動は成立しなくなっている。少人数に対して手厚い設備や教員の指導が必要であるとともに、一定の規模も必要で、一定エリアにおいて一定数の公立の定時制・通信制高校が必要である。
- 通信制では、自分で学んでいく力が必要である。自由度が高くて単位数も少なく、学校に通学するスクーリングも少なく済むが、自分で計画を立てて学んでいかなければならない。だから、気安く入学するが、気安く辞めてしまってもする。入り口も広いが、出口も広い。途中で辞めた生徒が再入学できるシステムはある。公立での通信制の在り方は、全日制での特別支援教育なども含めて考えていく必要があると思う。
- 不登校や学びの特性がある子どもたちにとっては、どこまで個別に対応できるのかというのが非常に大きいと思う。不登校経験があるけれど頑張って高校へ進学した生徒が、通信制に進路変更することがあるが、通信制で単位を取っていくことは非常にハードルが高い。自分で学んで、自分でレポートを出して、自分で試験を受ける。そもそも試験会場やスクーリングの会場まで行けるのかという難しさもある。そういう意味では、全日制か定時制かは別にして、同じ学校の中に通信制を併設するといった制度に加えて、その子が学び続けられるサポートをどれだけできるのかというのが大事である。私学ではそのようなサポートをしているところもあると思う。私学に行くのが困難な生徒もいるので、やはり公立の中でいろいろな支援がある方がよい。
- 不登校の子どもたちには、学校の中では初めは1対1の関わりが必要であるが、少人数の別室や、さらにもう少し大きな集団に入れるようになることもある。多様な学びの場をどこに用意するのが大切である。同じ学校内に定時制と通信制があったとして、子どもたちが異なる課程を選ぶだろうかということも考えてみないといけない。多様なものを用意することは非常に難しいが、必要である。
- ◆京都府は、非常に南北に広いので、地域によって対応の仕方や考え方を変えていくことも必要かもしれない。
- 現代では何もかも「多様」という言葉で、1つのカテゴリーに入れてしまっている状態だと思う。いわゆる「普通」というカテゴリーに収まらないものを、「多様」として包摂しようとしている状況なのではないか。不登校の問題、フレックスの高校とその他の定時制高校との違いなど、多様性の「中身」を分解して考えた方がよいのではないか。多様という言葉の中に何が含まれているのか、丁寧に見ていくことが大事である。
- ゆっくり学ぶという視点もあるが、コロナ禍を経て加速している視点は、もっと早く学びを進めたいというニーズである。いわゆるギフテッドなども含め、浮きこぼれ問題というのが、不登校の中かなり潜在しているような気がする。不登校が増えた背景には、学校に行く、行かないに対する、社会、世間、家庭の子どもたちの意識の変化があるのではないか。コロナ禍を

経て不登校の数が変化したというだけではなく、その質の変化なども改めて考えていく必要がある。

- 小学校などでは、今まで通常学級の中で自分を出すことを躊躇していた、尖った才能のある子が、むしろこれからの社会を担うんだというような風潮も見受けられる。過剰な期待とは思いますが、大事な視点でもある。
- 分離と統合の視点では、多様性を最終的に全部細かくカテゴリー分けをするのではなく、基礎集団において統合していくという考え方がある。これから「多様」のカテゴリーは拡大していき、「多様」の枠は増えていく。これまでの通常学級や普通教育の在り方というものの自体を、どのように問い直していくのかという議論が必要だと思う。この多様な教育の機会という議論は、実は現状の中学校や高校の、いわゆる「ノーマル」に対する異議申し立てである。そのような面で言うと、中学校や高校での学習支援、生活指導・生徒指導面も含めて学校生活の在り方、基礎集団のつくり方や学級の在り方などを、セットで考えていくべきだと思う。例えば、清明高校の生徒がのびのびと学校生活を楽しんでいる、そのエッセンスなどを、他の府立高校全体の中にいかに溶け込ませていくのかという視点も含めて、議論していく必要がある。その一方で、尖った才能も含めた多様な学習ニーズ自体はつかんでおかないと、そこに対する手厚さが保障されないことになる。そのため、カテゴリー別に細かく分析してつかみつつ、実態においては統合的に運用していくことが一番よい。
- 個別の支援計画を立てるのはよいが、学びを個別化することは困難ではないか。個別のプランも必要だが、同じ場で学んでいることの意味がある。そこに協働性が生まれたり、困った子どもたち同士での繋がりが生まれたり、様々な教育活動のバリエーションが生まれてくるところがある。多様性の実態を丁寧に見ていって、その上で必要なサポートは何か、どういう体制がよいのか、特別支援教育の専門性のある教員をどう配置するのかといった議論を丁寧に進めていった方がよい。
- ◆「多様」という言葉からは、支援を必要とする生徒や学力に課題がある生徒をイメージしがちであるが、その逆のイメージの、学力にアドバンテージのある子どもたちも含めて考えないといけない。個別対応・個別支援・個別最適化ということはもちろん必要であるが、そこにばかり目がいくと、集団性の形成という学校教育が果たしてきた一番重要な役割が一体どうなってしまうのかということもある。そうすると、個別対応を重要視する学校もあれば、一方で集団性を強調しながら、場合によってはアドバンテージのある子どもたちに対してしっかりと対応する学校があってもよい。そういう多様性を、縦横にしっかり見ていく必要がある。
- コロナ禍において、学習面が出遅れた子もいれば、自分でどんどん進んでいく子もいて、学力格差が生まれている。同じ不登校であっても、学校に行きたくない理由がそれぞれ異なる。インクルーシブ教育が非常に大事だと思う反面、学力や様々な才能を一緒に高め合っていくためには、ある程度同じカテゴリーの生徒同士の方がよいこともある。そういったバランスの取り方は、非常に難しい部分である。

- インクルーシブについては、どういう範囲で包摂するのかという視点を持つておく必要がある。マジョリティかマイノリティかという関係では、どこをどういう円の中心に引き込もうとするのか、包摂しようとするのかによって、ときにはマイノリティにとって暴力的になり得ることも心がけておかなければいけない。
- 大学には、不登校を経験している学生が一定数存在している。その学生たちが捉えている「不登校」は、ネガティブなものばかりではない。その時間にいろいろなことを考えた、親子関係も含めてしんどい時期があったが今はこう変わった、非難されている弱い人たちの気持ちが変わったなど、何かを乗り越えてきたという思いは、必ずしもその時期をネガティブに捉えていない。加えて、そういう課題を乗り越えてきた学生や、課題を抱え続けている学生が、大学でいろいろなものを吸収して伸びていく姿もある。
- 支援といった観点となると、弱いものに対することとして見てしまう。学校に通える子どもたちが正常で、そうでない子どもたちには何か課題がある、弱い、というようなラベルを社会が貼ってしまいがちであるが、そうではないと思う。中学校・高校・大学といったフレームワークの中だけでなく、実社会とも繋がる視点である。大学生が就職をしていき、会社を辞めた、休職しているといった話を聞くこともある。若い人たちが会社を辞めていっていることには、希望が持てるといった側面もある。旧来の、いわゆる昭和型の会社雇用に対して反旗をひるがえしている、こんなところではやっていられないとして辞めているケースも相当ある。そういう考え方で、ベンチャー企業などでなら自分たちの力が発揮できるとか、朝起きるのは苦手だがフレックス制だから仕事を任せられているとか、自分の特性や働き方を合わせていっている若い人たちも多くなっている。
- 社会の変化は想像している以上に大きくなっている。大学でも、いまだに上場企業等への就職実績といった指標で測っている。こういったものはもう若者たちにとって何の意味も持たなくなっているという現実をどう考えるか。旧来の物差しと現在進行系で走っている社会状況の物差しが合っていない。そう考えると、遅れているものに対して抵抗できている力、オルタナティブを志向する力という観点も、非常に重要である。そうして要素をうまく体現させているのが、広域通信制高校なのではないか。その学校に行きたいと思って、エリアを関係なく学生たちが飛び込んでいく姿を見ると、うまく一人一人の力を引き出しているのかなと思う。
- 資料8の定時制課程と通信制課程の就業状況および実態等をどう読み解くか。時代がこれほど明確に大きく変わっていることを、どう捉えるのか。旧来は正社員が主体だったが、パート等や無職が増えており、社会との接続の視点からも考えないといけない。課程の議論には様々な可能性や希望が詰まっていると思うが、時代の実態と議論がずれてしまっただけでは危険である。資料8は文科省の全国調査であるが、京都府でも同じような傾向があるのか。
- 基本的には同じ傾向をたどっていると捉えている。そもそも働きながら学んでいくというのではなく、定時制に入ってから、学校の指導を受けて何らかのアルバイト等をしているという生

徒が増えていることは間違いない。京都府の状況を示せるものがあれば、次回以降提示させていただく。

- 高校としては、定時制の生徒のアルバイトは推奨している。生活のリズムができることにもなる。卒業時にはほとんどの生徒が就職するが、その際には正社員として就職している。
- 全日制・定時制・通信制いずれの課程においても、京都府が行っているフレックス学園構想を基本の形とした教育を考えていただきたい。その中で定時制・通信制においては、通学すること自体に課題のある生徒にも、高校教育を受ける機会を提供すべきである。また、義務教育段階での学習につまずきがある生徒が、高校で学び直し、大学等への進学ができるということも必要である。あるいは中途退学することがないように、生徒が福祉的サポートを利用するための窓口となることも考えられる。全日制においては、生徒の状況に応じた多層的なレベルでの学習、学び直しから難関大学受験までの様々な学習環境が、学校ごとに求められる。
- 中学校までで将来の目標や興味のある分野が見つけれなかった生徒が高校に入学してくることを考えると、高校1年生が終了する時点などで、将来に向けたコースや類型の選択ができるようにすることが必要ではないか。専門学校と連携して、通常の教科学習以外の多様な活動メニューを豊富にすることも考えられる。それが将来のキャリア教育にも繋がっていく。外部講師や機関を利用してキャリア教育を強化すること、学年や教科の枠にとらわれない自由な履修課程を提供することができないか。
- 特別な支援を要する生徒に対しては、全・定・通の全課程の全教員が指導・支援できるようにならないといけない。教員が専門的な知識やスキルを磨くこと、また、生徒対応に悩む教員をサポートする体制の強化も必要である。
- フレックス学園構想の実現に向けては、十分に訓練された教員と外部機関との連携、少人数クラスの設置などが必要である。体制を整える上では予算の課題もあるが、公立高校ならではの良質な教育を行っていくためには必要なものとして、予算要求していくべきである。また、学校の中で校長などが描く理想と、実際に指導する教員の思いとが乖離してはいけない。教員が十分に現状を理解し、改革を進めるべく積極的に行動する風土づくりが求められる。
- 定時制・通信制での対応も含めて、多様なニーズにどう応えるかということが、この何十年かで一番ドラスティックに変わっていると感じている。そうしたことから、実質的な議論の1回目のテーマとさせていただいている。フレックス学園構想に基づいた清明高校・清新高校は昼間定時制にあたるが、課程の別以上に、本来的な単位制であるということが一番大きな特徴である。単位制という制度に、ひとつこれからの可能性を感じている。
- 個別最適や、個々への対応ということが、今の時代において当然大事にしなければならない視点であるが、学校を運営する立場で考えると、非常に難しい面もある。例えば、どの学校にも特別支援学級のようなものを設置できるのか、あるいはすることが適切なのか。そういったこ

とも踏まえて、検討してまいりたい。これからの教育においては、子どもたちの多様なニーズに応じていくことが望まれている。しかし、圧倒的なマジョリティ、大多数の子どもは全日制の学年制課程の高校への進学を望んでいる。ここを見落として、多様なニーズということだけを捉えて、全ての学校でそれをやっていくことが本当に適切なのかも考える。

- 清明高校・清新高校は1つの新しいスタイルであるが、そういう形がよいのか、あるいはさらに進化した形がよいのか。本日の御意見を踏まえると、定時制や全日制と、通信制との連携が考えられないか。そういう学校をいくつか新たに設置するのか、あるいは今ある学校の中で形を変えるのか。そういったことも踏まえて、多様なニーズに応えるための様々な方法などがある中で、府立高校全体でどのように進めていくことが一番望ましいのかを検討していきたい。様々な御意見をいただく中で、これからの方向性を考えていきたいと考えている。
- 定時制・通信制というと、不登校や特別な支援を必要とする生徒に選択されているというイメージがあるが、実際はそれだけではない。ギフテッドなど、特別な能力を持った生徒が、全日制に通うことが息苦しくて選んでいるということもある。現に、定時制から大学に進学している生徒がいる。そういった生徒たちをしっかりと育てることが必要ではないか。例えばホワイトハッカーなどは、高度情報化社会において非常に必要な人材である。特殊な能力を伸ばせる学校という視点も、検討の1つだと考える。
- 特別な支援という負のイメージだけではなく、特別な能力のある将来性のある子どもたちという前向きな捉え方において、フレックス校などで対応していくことは重要である。そうした学校をやみくもに増やす必要はないと思うが、現状の京都市内と丹後地域の2校だけでは、府内の全てのニーズに対応できない。清新高校にも広範囲から通学しており、始業時間を遅く設定するなどの工夫をしているが、府内全体を考えると、もう何校かが望まれる。また、北部地域では、学校をいくつもつくることや、様々な種類の学校をつくることはできないので、従来の普通科の中にそうした要素も取り入れていくなど、地域性も踏まえて考えていくべきである。
- 通信制では、公立なら朱雀高校があるが、現実として私学の通信制が多く選ばれている。ある中学校で普通学級に在籍していた車いすの生徒が、テニス競技を続けるために私学の通信制高校を選んだ。その高校であれば、大会に出るときなどに融通を利かしてもらえ、いろいろな部分で対応してもらえという理由であった。保護者は公立高校に通わせたいという希望を持っていたが、いろいろと比較をする中で、最終的には私学の通信制しかないという判断になった。朱雀高校の通信制がそういうニーズを全て受け入れられる状況であったなら、選ばれていたのではないかと思う。
- フレックスの高校に関してはニーズが高まっているので、予算の問題はあるが、南部地域にもう1校増やすことができればよい。子どもたちのニーズに合った、子どもたちが何を求めているかという視点で考えていく必要がある
- ◆平成23年の「定時制・通信制教育の在り方の懇談会」における生徒の意見で、非常に重要だ

と思ったのは、全日制が続けられない、あるいは全日制に合格できないとなった際に、すぐに「次は私学の広域通信制」という選択に陥ってしまうことだった。その際に、もうワンクッション必要だという印象を強く持った。全日制で続かなくなり、通信制を選択するとき、広域通信制の私学にとなってしまえば、サポートする体制が非常に希薄になる。公立の教育システムの中にしっかりとサポートシステムがあれば、もっと救える生徒、あるいは応えられるニーズがあったのではないかと、当時も考えていた。今、定時制・通信制を含めて機能が激しく変化している。そのあたりも踏まえた、高校の在り方、あるいは多様性ということがあるべきではないか。

- 学習が苦手でも、例えば絵を描くことには大変意欲的に取り組めるという子どももいる。何が「普通」かという視点では、ギフトや特性という見方で、周りがきっかけづくりをしてやることも重要である。子どもたちは、乗り越える力や考える力の可能性を無限に秘めている。1から10まで全部支援するのではなく、きっかけをいかにつくってやれるか。そういう配慮が子どもを伸ばしていくのではないか。少子化が進む中、全ての子どもが宝であり、誰一人取り残さず育てていくことが望まれる。
- ボリュームゾーンに特別な学校をつくるよりは、ある程度通える範囲の府立高校の中に、何らかの事情でなかなか普通科の普通コースでは学びにくい生徒が学べるようなコース設定ができる方がよいと思う。例えば単位制や通信制と連携するような形で、受けた授業、修得した単位も盛り込みながら、学年制にこだわらずに卒業できるようなコースが望ましい。
- 大多数の中学生はいわゆる全日制の学年制の普通科校を選択するが、普通科の特色が「特色がないこと」になってしまっているという印象が非常に強い。普通科の魅力化について議論が必要である。ある高校では地域の企業とのコラボの中で実社会での経験を積みながらのキャリア教育ができる、ある高校は大学の先取り学習ができるシステムがあるなどといった特色化も、多様なニーズへの対応として考えていく必要がある。
- 今は行きたい高校が選べる時代となっている。中学生から選んでもらえるように、各学校が魅力ある特色づくりをする必要がある。例えば、英語教育に力を入れている、部活動が盛んである、職業系の学びもできるなどである。また、定時制と通信制とが連携した学校や、特別支援教育などの手厚さがある学校も考えられるのではないか。それぞれの学校が特色ある学校づくりをしたうえで、うまく中学生や保護者に伝えていけるとよい。今の子どもたちは、良くも悪くも情報が多く入ってくるので、うまく伝わる仕組みを考えることが必要である。
- ◆特別な支援を要する生徒について、高校と特別支援学校高等部との関係性は、どのように考えていくのがよいか。適切な教育環境といった視点で、特別支援学校で学ぶ方がよいという考え方もあるのか。
- 高校に不登校の生徒が学び直せるコースや、特別支援学級といった形でなくても、特別な支援に対応できるコースのようなものがあれば、高校を選ぶ生徒もいるのではないか。さらにもっ

と手立てが必要ということであれば、特別支援学校の高等部が適切である。それぞれ実態に応じて選択ができることが望ましい。

- 特別支援学校については、学校教育法施行令第22条の3に基づき、障害の程度が決まっている。市町村の教育支援委員会が小・中学段階についてどの学校が適切だという判断をしたものが大前提となるので、その就学判断に関わる難しさもあると思う。小・中学校での困難な部分としては、自閉情緒障害が強くても知的障害がない、アスペルガー系の強い特性のある子どもは、法令の基準では特別支援学校を選べないということである。その子どもたちが高校に入学していくことになる。中学校では知的障害の特別支援学級で学んだが、特別支援学校に該当する程度の障害がなければ、高校に入学する。そうした生徒たちが、通常の普通科の中で学びにくさを抱えているのだと捉えている。その支援を、普通科の中でどのようにしていくのが、大きな課題である。
- フレックスな学びのニーズが高まっていることは、1つの現象である。ニーズの多様性を分析的に見ていくことはできると思うが、それに対して提供するサービス、教育内容を分節化するのは別問題である。むしろ、通常学級の在り方といった視点でのフレキシブルさで対応できることもあるのではないか。ニーズの根本は何かと考えると、学習面での差もあるが、それ以上に学校の集団生活への不適応があるのではないか。学校での集団の在り方が共生的なものになっていけば、大きく変わってくるのかもしれない。全日制普通科や通常学級の在り方が、システムだけでなく、風土としても変わってくることで、フレックスへのニーズが高まっているという現象自体も変わってくる。学校の特色化を考える上でも、フレックスのニーズに応えるということを切り口に、実験的な取組を進めていくとよい。
- 単位制については、修得主義の方に寄せていくという視点になると思うが、修得主義には「小さな修得主義」と「大きな修得主義」がある。高校の場合、小さな修得主義でいうと、割り切って検定試験などで試験にパスすればよい、英検で何級以上であれば英語はもう単位認定をするというようなことになる。スタンプラリーのようなイメージであるが、生徒によってはそれで最小限で済むことになる。例えばフィギュアスケーターであり、高卒資格だけ欲しいという生徒にとっては、そのような割り切った学びもありかもしれない。しかし、高校教育には人間形成の側面もあり、その意義においてはそれだけではない。大学も修得主義ではあるが、最後に卒業研究、卒業論文、作品制作といった大きなタスクがあることによって、卒業の最終的な認定をしていく。それがあって協働性が一定担保されるというつくりである。
- 今後、高校が全体的に修得主義に寄っていくことは間違いないと思うが、単位制の運用の仕方には様々なバリエーションが考えられる。高校の特色化全体の問題としても捉えることができるだろう。学校の機能を主に学習面、社会性、保護機能と捉えて、機能別に考えていくこともできる。学習面では、通信制との併修などによって、割り切り型でやれる部分が一定あるかもしれない。ただし、知性を涵養するためには十分な対面での学習も必要である。社会性については、行事・部活動などを複数の高校から集まってやっていくことも考えられる。保護機能からすると、基礎集団が重要になってくるので、ホームをしっかりと固めていく。そのように、機

能別に、柔軟に運用することができるのではないか。

- ◆前回の会議の資料にあった「高校生のアンケートの結果」によると、高校生は自宅から近い学校に行きたがっているようにも読めるが、本当にそうなのだろうか。もちろん地元志向が強いという部分もあるだろうが、どのように考えるのがよいか。
- 専門学科では特に、府内の広い範囲から中学生が入学してきている。「近い方がよい」というのは、近ければ近いほどよいという意味ではなく、通える範囲に選択肢が多くあればよいという意味ではないか。京都府は南北に長いので、京都市内と北部地域とでは少し異なるかもしれない。
- 中学生にとって、近くの高校がよいかどうかは、1番目の条件ではない。ここ数年では、1番目の条件が、高校卒業後の進学実績に傾いてきている印象である。その次に、自分の学力等と照らし合わせて、合格できそうな高校を絞る。その次の選択条件として、近くであるかや、自分が入りたい部活動があるかなどがある。競技力向上をメインに置く生徒は、距離に関わらずその部活動で全国大会等を狙える高校を選択していく。以前のような地元志向とはずいぶん違ってきているように感じる。
- 通える範囲でさえあれば、距離が遠いか近いかは全く関係なく、大きな選択肢ではないと考える。部活動、オープンスクールで感じた学校の雰囲気、先輩がどういう学校に行ってるかなどが大きく影響している。そのため、高校の雰囲気や特徴を伝えることが大事である。オープンスクールや合同説明会などで、中学生は選択肢を広げようとしている。自分で見て、感じてという部分を、中学校での進路指導では重視している。
- 高校に特別支援学級をつくるかどうかではなくて、様々な学びのニーズがある子どもたちがおり、その子どもたちが学べるところがあるかどうか重要であると思う。様々な障害のある子どもたちのために何をつくるかではなく、その子どもたちが学べる適切な場があることが、子どもたちにとって一番よい。コミュニケーションに課題のある子どもたちがうまく学べるところ、ゆっくり学ぶ必要がある子どもたちの学びの機会があればよい。
- 私学の広域通信制へのニーズから何を学び取り、それを地域にどう定着させるか。あるいはそういうものを参考にしながら展開する視点が大事である。そういう観点では、専門学科を持つ高校の活用が非常に有効なのではないか。現状ではかなり定員割れをしている高校もあるが、そういったところにテコ入れをしていく。職業教育という観点で見ると、大学でも実学的な農業への人気が高まっている。若い人たちの新規就農がかなり増えていて、農業というものへの向き合い方がかなり変わってきている。ICTを掛けあわせたスマート農業への展望もある。これは地域の持続性においても、食料安全保障の観点から考えても、大事な視点である。そういうアップデートにおいて、通信制との掛け算も考えられるとすると、いろいろな可能性が見えてくるのではないか。

- 大学の状況もかなり大きく変わってきている。選抜をして大学生を選ぶことができる大学とできない大学が、明確に分かれ始めている。その文脈で言うと、高校の普通科内のガバナンスもかなり変わらざるを得ないし、現実的に変わってきていると思う。半分以上の高校生たちが推薦で大学合格を決めている現状の中で、普通科としてどういった目標を設定するかということ自体がかなり変わってきている。そう考えると、大学の街京都ということを生かした展開、今まで以上にドラスティックな高大接続が可能なのではないか。
- 教育委員会だけで考えると、現実性や現状制度などにとらわれた検討になってしまう。今日はより大きく構えた形で検討するヒントをいただいた。単位制についての補足だが、1つの学校の中で学年制と単位制を併用するということはできない。そのため、ある学科を単位制にした場合は、その学校の全ての学科・コースで単位制を敷くということになるので、申し添える。
- 座長から指摘のあった、高校を選ぶ理由については、総体として、1位、2位、3位という順位をつけずに見ると、「自宅から近い」というのは選択肢として多いと思うが、学校現場からの御意見を踏まえ、もう少し分析を行って結果が見えるようならば、次回報告させていただきたい。